

周易鈔

萃 咸 豉 謙
小過 歸妹 十

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

○譚地革

○繇曰、革亨、王假有廟、利見大人亨利貞用大壯吉利有攸往、革はあうまゆくもむしのんをあはれ、和合するべく、

王者乃有廟乎至て、祭り御まほゞく、誠の敬を致して、鬼神
も來佑める所よ、徳とつゝせば、人の徳きり、和合して、遂
に天道人道、よく支障よは、至の眞よあづび、
方性乃あつきよのを用ひ、鬼神敬崇どく、モノよ廢じて、
あゝ三をあづくなまの情よをあらなり、

○彖曰、革聚也、順以說剛中而應故聚也、

○彖曰、革聚也、順以說剛中而應故聚也、

上は兎の説みて、ひち坤のりよして、上は説の道とて民を
ほし下よりの政令よせつて、下不和合して、人わかつたり
皆持て、九又陽剛のたゞに位よゆりて、ひよ、應物のたま
けあるがよ、そく眾がまよより、トトノあつま、抱きつまる所

眞松よ厚なまの、慎よよむゆかり、

○象曰澤上於地革、君子以除戎器戒不虞。とえは、沼の
地よりあるハ、革の象からと、君子是を元へ、拘の向つする者と
至、もじらざるを仰るためよ、兵具戒なく、わきのみ
集り置くると、争ひと、ゆきよより、其儀とな、易と戒
候でよむかり、

○初六、有孚不終乃亂乃革、若號一握爲笑、勿恤往无咎。

此何、二爻ハ、我より四爻、互ちよりのあらよようち孚す、吉也、
之を、我共、二陰の數、あつまり互かよ、たゞき、二陰守て
なく、其正氣を捨て、もじんせれ、我數よ、あこぐゆをめも
ては、強よりうざあが、互陰よ、衆の劣となまことあらん、此心
持せず、情志を乱す、とく、正意のたゞしにはあらず、意
ぎるとあらば、智かよつて、うむなり、

○象曰、乃亂乃革、其志亂也、と云ハ、もじんせ、我數のため

よ、ほがきうらへてありて、正しき、せ失つてあるも、然情ニま
りて、少シのためよ、志シとれきざる所シして、もなかり、
○六二、引吉无咎、孚乃利用禴トコトアリテスナワチリヤリセナフニヤクヲ、
もけき也、中面乃正トコトアリテ、モハシテ、ナシトガ、九五の男と、お魚シカニ、群陰の
弓アリ、上トラよ遠トリ共トシ引て革ハ、お字シルガシ、
索セイ、よ革薄ハシと用ヒて、神明ミタマ、文ムカシ、卦カサガを飾トシムす、
も珠セイと辰トコトアリバ、下トシあはすり、馬ハシ和合ハグす、
と、慎シムで、すき、なると、

○象曰、引吉无咎、中未トコトアリ變也、とりふハ、かみの夫トコトアリ、お魚シカニ、
とすれ共アリタガシ、遠トリて、廻トリて、のりとトコトアリ、志シを變
せざ、も道シテ守リ、とくくる慎シムて、すれなり、

○六三、革如嗟如、无攸利、往无咎、小吝、此何、羣小、陰柔
もて、陽の位シテよ変て、たゞトコトアリ、よあハシ、あつまトシム、とシテ、

未シテタ、とシテタ、くシテタ、のシテタ、とシテタ、棄リ、
陰陽ハシ、文シテタ、よあハシ、され共アリタガシ、位シテタ、お魚シカニ、
革ハシ、とシテタ、お魚シカニ、近キ、よ未シテタ、ふシテタ、時ハシ、遠シテタ、

よ於シテタ、も魚シカニ、位シテタ、文シテタ、もんシテタ、

○象曰、往无咎、上巽也、上トコトアリ、は、巽說シツゼツの控リ、
と、文シテタ、

をもうぞしてれ高き、比くはと以警によて、上よりの
は永て、あつある時も居なり、

○九四、大吉、无咎、け角、处々革の時より、未徧居
て、馬よ迎、ちーとミ下モ輝陰も犯ありて、上不麗とせば、
モ道の革よもぎ人のいきやう馬よの道よあらざ、正
道よ往て、下ト、革の義よおて、情何バ、咎なしよて、ナ
ヨ、ちかり、

○象曰、大吉、无咎、位不當也、とりふハ陽也、弦の位よ居る
より、主位よ何、うきどて、我なまこと、善と至る、あり
ざりと、銀ありざと、下ト革、財とソを、君位よめらざるが
故、御功よ、ほこらざる、相よ、情て、免なり、

○九五、革有位、无咎、匪孚、元永貞、悔亡、け角、未徧、
修よ、至て、衆人をあつむ、吉祥よ、弘其位を正し守り、吉道
久て、なく、モ由と治時、叶位て、ときぞ、ひらねば、情何バ、
衆人般仰して、モ道大イヨリもと云、めり、

○象曰、革、有位志、昧光也、どりあは、王者の位よりて、王儀
儀の志、衆人よ、感通キテ、祥よ情何バ、人の彼徧て、多き
む、多く、孚の志を、たゞよきる所よて、あり、

○上六齋咨涕洟无咎。若何。勿恤。陰柔の少く。且て、
吉位。よのまえ。悦。とのまき。人のくみまろと。かちよ儀。て、
革。と。故未。とり。共人。与せざる。がた。窮。して。齋咨涕洟。
すれ。けいおざ。革。の強。は。敵。じて。悦。の強。は。悲。の
ら。と思ひ。を失。と。御。の情。のまて。と。む。あり。

○象曰。齋咨涕洟。未。安上也。とうは。少。の。よ。あ。き。る
と。袖。従。か。び。宣。と。失。つて。歛。よ。あ。づ。い。困。窮。よ。る。ハ。居。ん
づ。き。の。地。ば。ふ。擇。な。こ。玄。往。よ。主。居。处。誠。懲。西。よ。た。が。ハ。ざ。か
折。よ。情。何。バ。ト。ア。よ。安。ド。て。古。な。く。も。と。云。め。あり。

○元龜曰。魚。竜。會。聚。之。課。と。ふ。ハ。坐。宿。す。記。あ。つ。り。て。
廄。搏。あ。う。む。如。水。就。下。と。う。て。い。お。正。直。よ。ト。以。路。よ。あ。う。が
き。て。ち。か。り。

○卜解曰。澤。下。有。地。万。物。革。聚。養。賢。待。賓。用。財。之。象。ど。
は。ほ。の。閨。と。て。莫。ね。あ。は。ま。り。あ。げ。る。ど。く。革。の。財。よ。於。て。ハ。暨。去

き。表。ひ。財。用。成。ゆ。く。よ。て。ち。か。り。

○火歌曰。革。卦。多。賓。客。家。中。意。不。和。と。云。は。比。卦。賓。客。の。多
か。ま。り。の。事。の。多。り。多。中。よ。ハ。い。の。わ。融。せ。ざ。る。と。あり。然
り。と。は。け。て。ち。か。り。

○ト彖曰既革必散得龜思虞。ソツハ、物の革とも情が
けが散てゆり、龜思の聲なるも情まざれば厚を更に
あり、げんおと情でよりなり、
○評曰内外喜悅上下俱柔。聖の御内かまつてび風に
び慎わらば変くよ潤ひ乍りとあくもど云便より、

○○譯山咸

○繇曰咸亨利貞取女吉、咸ハ、柔と柔を君臣父子等
の、互備たゞいとぞ一み感ずるとあつてよれど其感すると、真正
の、ぢよに及ぶる時ハ、柔と柔、淫媚邪僻とい感するハ、邪の道
少くよが、柔を以て、取女とハ、柔の道のたゞく、礼義の備
厚よ、慎あきバ、感意の道、柔あきふして在也、

○彖曰咸感也柔上而剛下二氣感應以相與、は卦、兑澤上
小がりてようど、艮山下すあえどぐる、陰陽ね交り、君臣上下和
合して、感意するの意也、感意の道を極く、利と生る處ハ、たゞ柔

あり、あ剛栗れ威焉とんをばしからざれば、利きの道が
吉祥よ、天地威じて、弟相を生むるごく、聖人んが廟せりめ
天下和平年なり。せし翁仰情、廟事の道よ、たゞ、あひ翁を走
○象曰、山上有澤咸。君子以虛受人。君子山の下すはあり
トぞ固し、ニ物の柔、咸通するの象とアリ。ヨコテガサヘ、人交
るのをさうとも、けしおを候用てモヤ。

○初六、咸其拇一、はぬ段々、もよあるも、上の九四と、お廟まれど、
主廟也。はからざる小もよ、のんを鈍、廟もよとあたはしで、
御の勤く、進むとあるをぎるがど、を終る、靜かりよ寧よて、

早ううかんとまろまえと、もく、時でもあり。

○象曰、咸其拇志在外也。と云ハ甚志、勤て、上の九四は咸
まるとあきを、渉よらり、進すならざるも、けし翁よて、早、進、心も
よまうむと、もく、時を待の、慎もそよにあり。

○六二、咸其腓一、居吉。はめる事、下よあまて、とすう、意を
知あまとい、共、道極ちうき、上の云を、か侍して、事よ躁と、腓の足
と、苦よ勤く、あめり立て、あくよるが、とくはる时ハ失あらむげん
わがく、情も虚り、及ばず、あまをゆく、事よまれば、進退
迷ふけて、よれり。

○象曰、雖山居吉順不害也。と云ハ辰戌申酉のちに象矣
也。子午に友庶がるよりを、壬子辛丑癸丑を、是陰氣からひのほ、
やより主神よりあべー、吉羅よりも主はすあひと、靜かるを等、
壬の未を不彷彿しと、亥より勤と、往に極子時むとて私、私の威まか
告かれてこそ也。

○九三咸其股執其隨性吝。はぬれぬ剛陽の大よてべ、
のよよ在西道をいよおむ無きる、いやよてよひ、御きも股ハ飛
じ、自害するをあくを、且す離て勤ゾク、下の道ありにあひを、
ぐく勤、筋と、廢もく如私ト一て、まからざりを、けんわを、能情ぞ

○象曰咸其股亦不處也、志在隨人所執下也、と云ハ、
剛陽の質あきえ、ちよむちよむ變あくを、下ゆるめと勤ゾハ、執守、处
のあい角キヤ、けんわ極候、あきすのよあくを、下る、
人よあとかひ、靜よほんじてよひあり、

○九四貞吉悔亡憧々往來朋從爾思。はぬれぬ中によ
わよよひ、心の位があれど、吉羅よ、廢もくのまことれ、廢通の道
八員のたゞ、爻を以まれば悔し、若、想がいのうち廢より、私
術あそハモ明類もかり、陳く、偏廢通もくとあしけんわをも
私、私のつよ、像もすよしてよひあり、

○彖曰、貞吉悔亡、未嘗害也。憧々往來、未光大也。占云、私の感通焉、抑る無まるものあらず、いき係ハ、害あるも、康の道校セイホキ也、吉程よ、未光大、と云、けいわを時ど、私シかふして、感の道をちよしておれり。

○九五、咸其脢、无悔。占曰、勿殺也、君の悔毋もて、至孤也。不亨トと感せしもの柔也、獨き天下のたゞよ遠じて、との上六、不吉としむハ、偏校ヘンカウ下シテ、康カウするの道セバ。胸よかんぢどく、其私ウチモレもしく、康カウするの道カウ、公よ考る時ハ、至功大アタマ、一、けいわ持と慎ミ、私ウチのあくシみりに時ハ、悔カクムと云ウカウり。

○象曰、咸其脢、志未也。占云、獨ソロよ無ナシするものあらざり、を、康カウするハ、志シ潔アタマして、私ウチの道也、けいわをよく临ムで、私ウチもれて、衆人の康カウする所ハ、よあらずアラズて、おれり。

○上六、咸其輔頰舌。占曰、勿往而ハ、陰氣ヒメキ少コトハて、康カウの極カツりよ。より、人の身ヒトノカラシも、ハ、輔頰舌ツクニツクニとも、吉程ヨリ、至孤カウ内ナカニによあらず、独ソロ、康カウせしも、其ヒトをあたはり、口ヒトツの主ヒトシあらざり、少コトハ人ヒトせんゼンのぞく、やんとあるとアリ、猶シテ矣ヨリ、口ヒトツの時ハ、吉アリ。

○象曰、咸其輔頰舌。占曰、口ヒトツの義ヒツビに善シキ也、

眞もむかはるゝと全へと感せしもよならむ咸の道とは
ひふぞ、けし物ゆゑひく風うきまことまで咸するの様を
有り。

○元龜曰、山澤迫氣之課、とづぶ山澤の氣通ぢりて、殊
至微ミツをこるゝありハ、神明より感應あるこそ有り。
○卜解曰、咸文感也、と云てば卦上ハ兌タツの少女モ、兌下ハ
艮ジンの少男モ、則陽なる事よ、下卦咸文、感應の象とする正
き文、感應する時ハ、利害て有り。

○卜彖曰、剛柔感應上下和平、と云ハ、内外精粗セイスすもと
もくよ相融ウニテあらず、徧ヒヨウあるの、徧ヒヨウて有り。
○卜象曰、澤山咸處、感恩生、と云ハ、物のたゞきよ感通あ
リて、思はのうるといふ、家内和沾ハヂルて、往來ナガメによければ、運帶
なく、速スニヤカに行ひく者也。

木山蹇

○繇曰、蹇利西南不利東北利見大人貞吉

蹇蹇、あへかづきよもぞ、西南ハ坤の地也、を体也、艮也、
かひて、物よきるを順路するがよ、まみゆきてよしとぞ、东北
八艮の山也、至体險、往けり難がよ、行く利あらぎのをむん
ありとつ共、もくとくにせば、持少く、よもやからずもく身
および難うけて、よたよたするの情をもふり、

○彖曰、蹇難也、險在前也、見險而能止知矣哉、蹇

予子木の險とあひて、近と云はざるがよ、艮山下よどぎも

陰と冒して強きをもんとしてハ怖あるを経よ見陰能止
ややもく、私あともとを蹇難の時々富くハ人の多くよ

もるをあきバ蹇と赦功をもとあらむと云ふあり

○象曰、山上ヤニノウヘニマレハ有木蹇、君子以反身脩德、ケンナリシシコレモツテカツテニニ云は山の上木

水あるハ蹇難小して、進アシガきの象あり、老子も云々、以我
身スミを立スルて、徳タカシモとせしもとと雖シテどもけんわゆく、我身よ

ならざるハ修キムかミ、徳タカシモなハ、ならざるハ補キムの慎ワシニとよひり、

○初六、往蹇未ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ譽、ハニタサリヤミアリキタサハカレアリけ何ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ之處也、蹇の初六、往スイと

されば、弥ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ蹇ハニタサリヤミアリキタサハカレアリよハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、上ミ夷ヨリ居スルものよりき

也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往スイの志ハニタサリヤミアリキタサハカレアリあきバ難ハニタサリヤミアリキタサハカレアリとわスルて、ながらハニタサリヤミアリキタサハカレアリ之ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ明ハニタサリヤミアリキタサハカレアリをあきらめ、我陰

柔ハニタサリヤミアリキタサハカレアリを知スル、もとハニタサリヤミアリキタサハカレアリまハニタサリヤミアリキタサハカレアリ也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、是ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ交ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ陰柔ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、上ミ夷ヨリ居スルものよりき

也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往蹇ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ未ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ譽ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往スイ待ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、

てハニタサリヤミアリキタサハカレアリ止ハニタサリヤミアリキタサハカレアリて行ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往スイの時ハニタサリヤミアリキタサハカレアリを待ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、

支ハニタサリヤミアリキタサハカレアリとハニタサリヤミアリキタサハカレアリ來ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、時ハニタサリヤミアリキタサハカレアリを待ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ也ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、

○六二、王臣蹇ハラシンケンタリアラズ之故ハトニ、往ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、

六二、王臣蹇ハラシンケンタリアラズ之故ハトニ、往ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、往ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、

依ハニタサリヤミアリキタサハカレアリて、王臣ハニタサリヤミアリキタサハカレアリと云スル、士ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ、仕ハニタサリヤミアリキタサハカレアリと同ハニタサリヤミアリキタサハカレアリとハニタサリヤミアリキタサハカレアリり、五ハニタサリヤミアリキタサハカレアリの君ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ大ハニタサリヤミアリキタサハカレアリ蹇ハニタサリヤミアリキタサハカレアリの中ハニタサリヤミアリキタサハカレアリよ

あくよどり、志の蹇と赦たまひんとまれた、六二陰柔の方少く、
其作小往をして、蹇少となれり、然きを我身のかよあらざ。
小なり、も志かせらるゝとあり、けいわと、抑身を屬さるとも、
力と忠と辱と、抑が為すはまごろの情少くもにあり、
○象曰、王臣蹇少終无尤也、と云ハ、蹇の時より齒てふむ
、とあると、君を殺す志ある時も功も無とつたをふむと、
けしわふく、も才たらざる吏あるを共、も志ひ、かせらるゝ歟、
情少くもにあり。

○九三、往蹇來反、けある至而也、陽剛のづよきとい、正位子

あくよどり、下ろりの、先ふつき隠く、主事を得ぬきた、上尊者
不の身、陰柔もかほよ、往とには、蹇あると、ちよども、吏の進む
とある吏も、かづく、抑身も立かる、はおの情少くもにあり、
○象曰、往蹇來反、内喜之也、と云ハ、内卦の下ニ爻ハ、陰
柔かよ少人と、陰柔の少人、かづく立變あると、さうも、上
の陽剛あくよの小附も、がふと、も、あふり、けん翁も、ト
のとく、厚きんじゆの情あくよえてよむにあり。

○六四、往蹇來連也、けぬ、下り、考すをに、位乎あまびし、
銀雞ヤニの増スル、陰柔の方かひも立てず、アヌ居く遊スル

ひとしてハ陰よきちいろを、下より九三少しつてもあらば、
トの衆へちがひ附とありむけしわと慎て我才とたの三て、
えどもちまき衆ノ子、食とあるゆに持小怪よきも、
○象曰、往蹇來連當位實也。ともはち位とあると云、
蹇難の時ト有て、下を志と含むハ衆を引の處に陰柔
子く、陰の位を歩るは、蹇あるの事なり。所おと蹇難の時
小あまても、下の爻、冥とふ力を存救時ハちうの事なり、
○九五、大蹇朋来、姤䷫䷫、君の位なりといへ。蹇
難の位を陷て、大蹇の時となり。也せりト、二の正を蹇
るありて、正を輔助のたまけをもつて、朋来と云、
吉經よ、徳ある事小ても、よむよのたまけに、難を極、功
をなす事とづる。けんおとふ人の後、ちくびひまたる
角うよ、けりみありて否也、
○象曰、大蹇朋来、以中節也。ともハ我よ守の徳ある
小体ト、トの中正のりのお氣とく、大蹇の時とて、もと守、弊を
失さるぞ、げんわよく、考よ算策を失さる、輔とある事あり
矣失ざる事、よ、情ぐよれり、
○上六、往蹇來頤吉利見大人、此商而も、陰柔にて、

蹇の極シタカシヨ、モウしてモミントモレバアリ、下の剛湯乃
ナキモトモアキ、リのモレル時ハ、蹇扶杖、トアムモ、ばらお葉
でモリカリ、

○象曰、往蹇來頤、志在内也、利見大人、以從貴也。
云は、我が陰柔シタク、下九三の剛陽を棄てたまへうそ
時々モモリ、又のみの大人モ、モアヒミカガフ時ハ、モ
ラクモモロハ、一、心おき、卒尔モ、モテリテモトモ、移モ情
てモリカリ、

○元龜曰、飛鴈啞芦之課、云ハ言のヨギテ、モテ、
シトシ御たゞ、キルの象也、故有道モ、モモク、うづらきと
ちに屬シ、よ、情モテ、モリカリ、

○卜解曰、蹇者難也、卦部レは艮山モ止、上は坎水モ陰モ
也、みくもよまざるの象也、けん弱モ、情ざれバ、ど、不
足、力無モ、トアムモ、モ、モ、路モ、モ、モ、貞正と、守ム、トモアリ、
○卜彖曰、卦連、除人情相失、云ハ、いも、らざる事、モ、ア
テ、半の心失、なき、交應、アモ、人の心と失、莫、失、ぬ、セ
ガ、惜でモリカリ、

○評曰、蹇者難也、多有壅塞、と云々、物のぬきがきど、

こざりとまで、未だと遙かくありべし。多くはつど、時を、
心わたくし吉也。

地山謙

○繇曰、謙亨、君子有终。
下下ち少く、地の中山あるハ、極りて下るの峯少く、積はれ
んと、まづと成就ありべし。少へんと、久安、謙史とす。次第小
きもの、往ふやうてあきび、君子ハ、謙盛りて極りて、
理小亨。ひ達して、天をたの三、あむするとあるく終、と
くさるはい持少てをあり、

○彖曰、謙亨、天道下濟而光明、地道卑而上行、
夫は天の道ハ、降て交地、萬物と化育するハ、天の謙小て、

化育の功あらうとて、地の道ハ卑ミタク、物の道シモあるハ地の謙ミツキ
ても氣ミツカウ上アツカウ行スルして、天ミツコトより文シテあるは、天地ミツコトも少ミツシマ、謙ミツキと云スルで
けんわミツカウく、天地鬼神ミツコト人ミツヒト道ミツシキも、皆ミツツク靈ミツルと爲スルで、
主ミツシマて、ハ謙ミツキ事ミツモノと好ミツシマ。ハミツシマたるは、極ミツシマ御事ミツモノと將ミツシマあきバを道ミツシキ
して、先ミツシマ顯ミツカウかるミツカウ、も先ミツシマあらミツシマれて、吉ミツヨシ。

○象曰、地中ミツニ有ミツニ山ミツヤマ、謙ミツキ君子ミツコト以ミツシマ衰ミツシマ多ミツタチ益ミツヨシ、寡ミツタチ稱ミツナミ物ミツモノ平ミツシキ施ミツシマ。
ともハ卑下ミツシマのミツシマ小ミツコト嵩ミツカウと蘊ミツムの象ミツコトと、君子ミツコト是ミツコトとミツシマて、ちむミツシマ
のミツシマをミツシマくミツシマ、下ミツシマとミツシマげミツシマとミツシマ、とミツシマのミツシマ效ミツシマ
窮ミツシマとミツシマりて、主ミツシマ施ミツシマとミツシマ、とミツシマのミツシマ變ミツシマのミツシマをミツシマめぐらミツシマなミツシマをミツシマ。

○初九、謙ミツキ々ミツシマ君子ミツコト用ミツシマ涉ミツマタ大川ミツヨコ吉ミツヨシ。はあミツシマて、正處ミツシマ、柔ミツシマはミツシマと
剛ミツシマらぎミツシマ、下ミツシマありて、卑下ミツシマよりミツシマ、也ミツシマ、也ミツシマ、謙ミツキがミツシマくミツシマ、
小ミツコト而身ミツコトとミツシマぶミツシマ、又ミツシマなくミツシマ、人ミツヒトとミツシマの、情ミツシマ少ミツシマて、もミツシマかうミツシマ。

○九二、謙ミツキ々ミツシマ君子ミツコト用ミツシマ涉ミツマタ大川ミツヨコ吉ミツヨシ。はあミツシマて、正處ミツシマ、柔ミツシマはミツシマと
剛ミツシマらぎミツシマ、下ミツシマありて、卑下ミツシマよりミツシマ、也ミツシマ、也ミツシマ、謙ミツキがミツシマくミツシマ、
小ミツコト而身ミツコトとミツシマぶミツシマ、又ミツシマなくミツシマ、人ミツヒトとミツシマの、情ミツシマ少ミツシマて、もミツシマかうミツシマ。

○象曰、謙ミツキ々ミツシマ君子ミツコト卑ミツシマ以ミツシマ自牧ミツシマ、とりふミツシマ、君子ミツコトたるの道ミツシキも

廢ミツシマうミツシマて、牛羊ミツモノと牧ミツシマ、也ミツシマ、馴ミツシマ彼ミツコトせミツシマめて、よれミツシマて、常ミツシマに、
驕ミツシマ奢ミツシマのをミツシマりミツシマふミツシマして、其氣ミツカウを牧ミツシマ占ミツシマあミツシマきミツシマ、けんおミツシマゆミツシマく、謙ミツキ

○徳才剛かふを、愈卑して、愈卑からざるの、情少くをせ、
六二、鳴謙貞吉、はあり下也、柔にの厚り、にちがふま
けの位あるふも、備の徳を、すく小つみに有りて、か

らし、あらうるて、ざとひそはし、おもと、中の位あるま、正徳、
やうとは、中の徳あると、伏かふを、引く極小、情ぐをせ、
象曰、鳴謙貞吉、中心得也、と云ハ、備の徳を、至く徳

あり、又、中少穢、とあるふも、其、正徳、主徳の、聲色、ふも、
あらうるて、又ハ、勉て是を、あさでれ去、邪中、よくむす、
と、情め、よそ、うにあり、

○九三、勞謙君子有終吉、はあり、是を、陽剛の徳を、正
と仰ゆく、下の、上をめり、下をも、般役を、もめく、功勞め
見て、よく徳を、備へ、厚うぐるもの、夫ちに、娛樂、徳と、を充
と、人の、事に、情あて、平生、よく、備あるまよ、鮮、ふも、ままで
功勞、何より、ハ、備する、及ぢりが、こき、あぞ、けいわも、たゞ、
備あるもの、古を、知く、つも、なまとも、矜負の心を、忘ざる附
ハ、久あとあり、さざる、小も、君子ハ、功ありて、矜、も、久、を要せ
ざるの、情少く、終、あら、又と、ぞ、ときなり、

○象曰、勞謙君子萬民服也、と云ハ、よく、効備するの、君子

ハ萬民のまじ役ある事あるぞ、けつおとへ常して代らざ功也、
徳とまじるとなれ時を、ちけきを危からむ、謙とも謙ざるぞ、ま
そり、孫恭公の臣うきぎある時を殺し、身を守りて、謙すあ
時は、謙と名也、

○六四、无不利、撝謙、はあくとあく、上体少く、君の近事もあり、
九三のちかる功ありのく、よめ居る小も、説く懼情、功者
ありの身、謙居みじわあバ利あらどと云支ひなしぞ、玄程、
賢臣のよみ歩くハ、それをねまき、あらゆより、けつおとへ
でんばかり、

○象曰、无不利、撝謙、不違則也、と云は人の謙をもと、
冥柔正直、さうとあき毛、けらは、君の位を逃して、貴臣
のよみ歩くも、謙する程、則よたゞきてよみ歩く、
はづれ時あらば、人の代などするをあまて、用ひらるゝ莫
あもむと、云焉あり、

○六五、不富以基、鄰利用侵伐、无不利、はあくと近事を
富ハ、衆への敵役ある如ふて、財用を人をあほめ、君の恵子
あき毛、謙にて辱うて辱うて、うむにとふ用、麻衣お兼、
と云ぞ、我レども、ちう少儀原小して、うむにとふ用、不富以基、

支あバ利ある隻あもと云義也、

○象曰、利用^{アリト}侵伐^{スル}征^{シセイ}不服^{スル}也、どソハモニ備^{スル}兵^ヲして争^フ、
アリテ^{シテ}彼^モ支^ナけ^ムバ武威^{アブ}を用^ヒて、^ミ更^テを流^シ、^シ抜^キを、君^モの^ノけ道^モはあらざ^ル、^シはいわす、
アリ^シ小馬^{イカ}とたこ^シを奉^ハりに極^シめ^シよ^ハアリ、

○上六、鳴謙^{メイケン}、利用^{リフリモニユニヤリ}行^{イクサヲ}師^{セイ}征^{シスルニエラ}邑^{コク}國^ノ、^シあ^リ下^モ不^可處^シ、^シ谦^シ

の極^シかく^シふ^シより、備^シを極^シ、^シ底^シきよ^ハ却^テ立ち^シよ^ハアリ^シ小馬^シ、^シ備^シの
志^シを遂^ゲざる^シ支^ナあ^ム、^シ古^シ程^シ小^シ頂^クト^シモ^シ、^シ位^シみ^シが^シく、^シ立^シ

小^シ住^シせ^シか^シ居^シなれ共^シ、^シ抑^{ヘタ}邑^ノ國^ノ征^シむ^シく、^シ私^シと^シく

治^メて^シて^シ居^シ、^シけいわ^シ候^シ、支^ナバ^シ、^シ之^シを^シ變^{ハシ}き^ム、^シ變^{ハシ}き^ム、^シも、

○象曰、鳴謙^{ストハコロモシイニタ}志^シ未^シ得^セ也、可用^シ行^イ師^{セイ}征^シ邑^ノ國^ノ也、^シど^シハ^シ備^シの
極^シあれども、^シト^シあ^リ小^シ、^シ備^シと^シの志^シ候^シば^シぞ、^シちふう、^シ、^シ

陰^シ柔^シ少^シて、^シ信^シ小^シあ^リ、^シうざ^リぞく、^シオカ^シならざ^ル居^シなれ共^シ、^シ是^シの
の私^シを^シ治^ムとは、剛^シ武^シと^シ、^シ行^{ハシ}ひかり、^シ、^シ

○元龜曰、地中^{テウニアルノヤニ}有^シ山^ノ之^シ課^シ、^シど^シは、備^シ退^シの情^シおま^リて、^シ山^シ
而^シ多くなる^シと^シあ^リ、^シ抑^{ヘタ}乾^シ下^ツと^シ云^ハぬ^シな^シま^リ、^シを

んよ^ハたま^リ、^シ身^シ持^シと^シする^シいわ^シふ^シま^リ、^シか^シり、^シ

○ト象曰、謙^シ之^シ君子^ノ、退^シ无^シ疑^シ、若^シ欲^シ未^シ官^シ、必^シ見^シ遲^シ、^シと^シ云^ハ、^シ

君子ハ徳を爲ふより、備^ルと不^レ疑^ジ、官職を未^ルあらば、乞非
ふせざる、仁^レや少^クよしむぞ、少^人のどく、あるむをあひてハ、是^ニ
口^レ古^シの事^ニあらむ、と云^ハうあり、

○十干詩断曰、衆裏更牽連、憂疑滿目前、一と云ハ、衆裏

の変^カれ速^{ツレ}あき、憂疑のいもからざる疑^{アモシ}も、財^{メイ}也^{ヨシ}、

ぞく、財^{メイ}も事^ハ明^{タケル}んて、我^ハナカウ^トと、今^ハ傳^{タケル}ハ、わ

ふて、うこみ^ミ打^{タケル}て、肉^ハと、核^{アリ}あり^{コト}、今^ハ小^ハ惜^スで^キ、

○評曰、謙者退也、日^ハ有^{ケン}謙^ハ、有^{ケン}盈^{アリ}、有^{ケン}虧^{アリ}、と云ハ、日^ハも

盈^{アリ}とあき^ハ、謙^ハて虧^{アリ}事^ニあるぞ、人^ハあざけりと將^ハありて、

移^ハ身^ハと廉^ハして、化^ハう^シま^ハ、將^ハありバ、とくよなが^ハ、
なか^ハじとう^ハあり、

雷山小過

○繇曰、小過亨利貞可小事、不可大事、飛鳥遺之音、

不宜上、宜下大吉。

小過豐、ことにしきらとよむじ、枉もを

あめて、正きことは、も常とがくあり、よりぶるを

け、なめて正きとは、ごくたゞくもの裡あり、小事小はざつ

れ共大事とは、かど云は、飛鳥の音と遺ふと、小く不宜上、

宜下、心持小く、物のあまり、私とたるとなく、往路かくおじり、進

あらの情ふて、おじり、

○彖曰、小過、小者過而亨也、過以利貞、與時行也。

どうは、小さくまきをして、なにかよする板せば、さるの車
時の豆スコシを失スコギて、またでけ卦陰裏ウニキよりの、中正の位イウ
やうり、ゆぢる支ハナリ支ハナリをふく、たぶらまよはよめん
玄宿スコギよ、飛ハシのとく、上アゲル支ハナリふく、下アゲルもよき支ハナリ時イウ
の、時イウくよひ。

○象曰、山上有雷小過、君子以行過乎恭、喪過乎哀、
過乎儉、どうは、家の山ヒトツよ震ブレブハ、小過の象也、君子是を克
て、支ハサウエのとく、驚ハラハラ、身ヒムも、此ハシおとづれハラハラ枯ハラハラよろて、よひ。

○初六、飛鳥以山、此ある至處也、陰裏ウニキ少シモ人ヒトの
どり、居ハサウエ思ハシひく、躁ハタマツす、其ヒツ驚ハラハラ、而ハシのめも、モ作動ハラハラ、
主事ハサウエあひて、あひて、飛ハシく少シモ人ヒト、峰ハタマツと向ハラハラぞ、はのわとふ、
立ハサウエ候ハラハラよひ。

○象曰、飛鳥以山不可何也、ともハ、もよの病トキとがる
の迅ハヤキが、とく、なりハ、後アフよ赦スミ、とく、主ハサウエれれ其ヒツあへき。いふもよき、
かうもと云ハサウエり、とく、進アゲルとを云ハサウエ候ハラハラよひ。

○六二、過其祖遇其妣、不其君遇其臣、无咎、因ヨリあり知トガ、
栗ハシ中の徳トキあり、六五の失スコギと、徳トキを因ヨリ、お爲ハサウエるを猶ハラハラ。

きくみ意まれる、君が心のぐとちく、臣の道小あそれば皆々
とくけんわは情ど、其分限ふうすうとかふしてよきなり、
○衆曰、不及其君臣不可過也、と云ハ、さうの附ねりよき、
考小さきとある處也、ほうてハ、づまの時どう共、少しもと、上等
杞憂が、さうあかり、とく情ぐとくあり、

○九三、弗過防之、從或戕之、凶、第至重也、陰のをくわづ、

位を失、時かれ、は、爻もとりぬじて、ある下のよすありて、能を
ろとむに、がぞく小さく、衆陰のため、小焉、下のよすありて、能を
めかつき、めが、防ぐよき壁、能を、少人のある時かよ、そこも見

て、御もとまく、剛もとを、かく、正き、防情ぐとくあり、

○衆曰、從或戕之、如何也、と云は、陰のをく、時ハ、陽を害す

るごく、少人のある時は、君子を害するをある、せひ能やく、少人

小ちこがひて、ハ、戕もとを、防で、も害ゆば、がち極小、情ぐとく、

○九四、无咎、弗過遇之、往厲必戒、勿用永貞、凶、

ある處も、剛陽なれ共、陰柔の位、あるを、剛もとを、りき

めたり、咎もとを、主事み叶、とある、抜きも、陽の性は、堅剛

なりと、進とは危、少なり、時も、往く、剛徳をかく、守、陰が、

去程ふ、ち位のあるとも、上トの、爻、なにがぞくなるよゆゑ、

惧とすてて、ほよると休陽の情ふく、主賓小叶トアリとあらま
○象曰、弗遇ス、遇アトハ之位ニクテサ不當也、往厲必戒終不可長也、
云々、陽かく陰の位トあるは主位ト、苟アタラざれを陰乗マツラて、剛マジ
主シテ、陽ヒツを陰ウニシマして、重アタマ叶トせぬと、けんおと、靜ミニ
主シテ、時トまつ情モテと、主シテ、
主シテ、時トまつ情モテと、主シテ、

○六五、密雲不雨、自我西郊、公弋取彼在巖、
而ト、陰乘マツラして、亨位トあると、行ココナシとされ、功コトハシしゲ、
雲密まれミツリ、氣エあらびアラビらガどし、モカとシむシりガのト未レバ、乞
之シテ、陰乘マツラよシく、大タあるとヤハ、かカし、時トと待ト、をシづル、
吉シ、慎シ少シくシよシひシ、

○象曰、密雲不雨已上也、ト云は、陽ヒツを、陰ウニシマして、和
合ハセバ、互ミツ小シ、トよあられ、密雲不雨、
互ミツ和ハセバ、互ミツのシや、トく情モテで、往シテ特メニく、トもシりシる情モテ、
主シテ、時トと待ト、をシづル、

○上六、弗遇ス、遇アトハ之飛鳥雞ヒタチニニ、是謂災眚サイセイト、
前アヘは、陰乘マツラして、互ミツのシの極ヒタチよシり、其ヒ理モ遠ヒ、事モノ也ト、
互ミツのシの遠ヒ、もシれて、凶ヒツにしけシケいシお休ヒ、天アメ下モもシくシ、
互ミツのシの遠ヒ、もシれて、凶ヒツにしけシケいシ來アリ、互ミツのシくシ、

○象曰、弗遇、過之已亢也。と云は、きの後の後、す居ハ止
陵、邪よありをして、もの極りのを、すよ作物を退、王室して
ありとむと純、かく情、ごよにあり。

○元龜曰、飛鳥遺音之課、と云は、能うの、とりあらがく

あるハ、逆、あるせの、のびると、かあくまくさる極よ、情、ごよにあり。

○彖曰、用心過高、豈勞心力、と云ハ、たうぬり、もつとありハ、

んかせ、勞、もととあり、むくよむくよ、極、ごよにありて、吉也。

○十干詩断曰、躁進、將成、无妄、とみて、吉、かく、非、もとて、吉。

寧、心体靜、は、身と安、じて、天の命、す隣、あらば、自然よ、と変あむ。

○雷澤、販妹

○繇曰、歸妹征凶、无攸利、販妹、も、いよ、と、ちぐとも、

ぞ、男女乃ね、往、と、寧、ハ、吉、と、こ、な、沙卦中、ニ、爻、陰陽、乱

雜、よ、て、たゞ、からば、れは、正、か、ざ、ふ、け、あ、を、つ、も、

と、城、ゆ、ぞ、女、乃、と、ほ、は、婦、の、徧、けりて、正、き、道、善、

り、の、ぞ、去、往、か、心、の、す、よ、を、こ、三、行、ひ、せ、い、約、も、高、

き、り、ア、よ、進、か、居、み、情、て、よ、に、あり、

○彖曰、歸妹、天地之大義也、天地不文而萬物不興、販妹、
人之終始也、說以動所販妹也、こ、り、よ、ハ、沙卦、陰陽、文

男女配合ドニは、天の常理ルレギ。先の少女ミツテ、既ヨリ失タマフ。
ち正シテからタマフて、位スルらきカハ、古アヒとシテ、拘スルたゞタマフ。

臣ミツテは、私情ミツテありタマフ。我欲シタマフ哉タマフ。よきるハ男女ミツテ、若シテ。
慎シテ忘タマフて、陰ウラ陽ミズをタマフ。則シテ無シタマフは、利スル處タマフにタマフ。けい
持スル以テ義ミツテの正シテ、よりタマフよシテ。うしろタマフり、

○象曰、澤上有雷歸妹、君子以永終知敝。云々。上アシテ下アシテ。先タマフの天ミズを、陽ミズ動クルして、陰ウラ說スル。君子ミツテ此象知ルて、

男女ミツテの道ミツテ正シテ、淑シタマフと承ル。敝シタマフありタマフ。既タマフが如ク、
如ク強シテ、久シテかづキの道ミツテを教スル。けんおミツテ拘スル生リ、
貴シテの内ミツテ正シテ、守ルの性ミツテをタマフ。

○初九、歸妹以娣、跛能履、征吉。涉行、東面、二女之貞。跛シタマフ而タマフ、
往シテ三ミツ無シタマフものシテ、婦シヤウ乃シテ家カム。能シタマフ也、陽ミズ則シテ、
往シテ有シタマフは、女シタマフよりタマフ。賢シタマフ貞シタマフの徳ミツテ、去ル經シテ、
往シテ何シテとシテ也、賢シタマフ良シ才アリ。遠シテ大シ功シタマフ、及シテ至ル也、
何シテ身シテも、元シテとシテ也、元シテとシテ志シタマフ。之シテ一ミツ方ミツテ、
而シテ西シテ、亦シテ有シタマフの性ミツテをタマフなり。

○象曰、歸妹以娣、恒也。跛能履吉、相承也。云々。是シテ飯シタマフ。

爰よ於て、説で征^{シテ}夫婦乃正^シ也。あはげ^シ交剛陽財
貞の法^ハめりより、情の道^{シタケ}が、もとよりありて、
至^シト^シ。さう^{シテ}なきを、跛^{アキ}の能^フ履^フざとく、モ君の正城う
げたをくら、いわあ^バ、征^テて、あらゆる氣^ハり、

○九二、眇能視、利幽人之貞。けり。主^リ不^リ陽剛^ミ、中^ニ成
ゆりよううり、女の男^ハあり、もみのり、よし正^シ無^ハる、不^レ
もみのり^リとつ^ル、陰柔成^ルたす、我^ヌ配偶^カらず^ハ、従賢
臣^ノのゆゑ^ハ、ふくろ^ヒて、時^ハふ遇^カ、躊躇^ム、獨^リもみの^リ、
けん^リ持^ムと、向^ムも身^と能^ズて、ゲシヅミ^ス徳^シ能^ハ明^カる
矣^ハ、能^ク尼^ルが^ト、を^キま^テす^ノ及^ブと、け^ハが^ト、
邑^ノ人の通^シ抱^テ、而^シに^シぞ^シちの、情^シく^シて、もみのり、
○象曰、利幽人之貞、未^シ變^ハ常也。と云は、も甚^シ貞^シ也
と、夫婦のたゞ^シ道^シ、常^シ失^ハく^シ、往^くの情^シの^シ
せ^シ、も^シの御^カ、も^シひ帝城^シ、妻^シも^シと^シ金^ハけん
お^シて、女の貞靜^カみて、御身^シ城^カお^シまつざ^ハすやう^シ
あ^シて、よ^シり、

○六三、歸妹^{ハキ}不^リ須^ハ及^ブ歸^シ妹^ハ、けり。主^リ不^リの上^{ヨリ}て、
モト^イヤニ^キ、
六三、歸妹^{ハキ}不^リ須^ハ及^ブ歸^シ妹^ハ、^頤、
けり。主^リ不^リの上^{ヨリ}て、
モト^イヤニ^キ、

きよどり、女の飯と経思とも心がけてゆく奴もいた
居る。けれど、せいかおもて和悦ありとどれをされと失くさず
いたり。

○象曰、歸妹次湧未當也。と云は、女の居處を法王飯と
其未だ、皆道す。何らかよどり、是と而あふる玄役原
と、剛とし賤とし貴と陵がるの情をいたる。

○九四、歸妹愆期遲歸有時。此句、玉帝は上体のちよ居
て、瑞剛うるむと、汝子よりては、正賢がりとて、然れ
ば、無む事す。不すけども、飯と引くと、何故也と
何らとハ能キ、恋とひて、ゆくもとむらがじと、其終よ思ふ
とを三す。又遂ぞとしんた能、貞女を惜ぞ、因縁行つと
ゆくば、賢めのたまけとふらむのゆくもと云々あり。

○象曰、愆期之志有待而行也。と云は、正徳故賢女を、ひ
要とひて、向とゆり、げづゆて才徳と身はして、えがく
立ちよぼして、能水と経合ひ、かゑて、えにゆく。
○六五、童貞歸妹其君之袂不如其娣之袂良月幾望吉。
此句、玉帝は、う位よりて、妹のうちも、うのぞ、下もの
空よお魚をすみどり、王姫の下、こもとまぐの義と

去程より貴身よりとも聖體よりて身りて、且宮飾
かざるをぞせば、れめせ尚のくあり月と陰ありとどき
盆ば端よ離ちるよりのこ詔す幾どうて、既至盆の時
○象曰、帝乙歸妹不如其婦之袂良也、其位在中以貴行也、
ト云は、ち貴の位よりとづきも、其毛よぼからとあく、
奉事するて、既居てれま五けいおゆて女は主位す
ニシテ男より、びして、れと踰とろしにすよ情でをと、
○上六、女承筐元實士刲羊无血无攸利、涉あ、主處
貞妹の既よりて、トモ六三より離され、陰柔るるかよたを
げとなづけ、嫁城治して、とののか、きぬぬすれとて、
らんとされ、既あきゆうよあむもんねと主、陰柔和
よ情あバ、自らみたをけみて、利あるとすむ、
○象曰、上六、元實承虛筐也、とす、陰柔主て、一卦の極
あり、冥引下てはなきけふの義なり、我身は行な
けきべんたまうの道ありせば能くもとて、主に御主、
○元龜凶、浮雲蔽日之課、こつよ八日之内なるごく正直
るゆ、をもいかくをいせ、能共心せば、もしやうよきるすよん
と角して主にあり、

○ト解曰、飯妹者不正之卦也、此卦も情なけきばかり

支ふきぎの時、時から通ず、さうれざらの心病をも

○火歌曰、飯妹陰私更欲生所陳心意未分明、と云は

私の人ちくづく私どは其内かみ陳られさうりのせがく

ノイハリ、うらとだに居るよ情で、とむふと、

○ト彖曰、陰陽不文、閉塞不通、どもは、下下極て、玉氣

匂うよ、文ざれば、人とふ通じて、何む能あく、とくとく

○十干詩断曰、春花秋月、兩相思、とみて、何の事、玉氣、心

うれど、うよあよて、喜慶めむと、云々なり

元文第五龍次庚申初夏

上陽山田郡西小倉邑

藤生山現主沙門純峯榮倫書



